弾痕が爆撃の凄まじさを伝える

九十九橋（つくもはし）

瀬野川は東広島市の曾場ケ城（そばがじょう）山に発し、最大の支川である熊野川と合流した後、中流部に至り、広島市安芸区瀬野南付近で南西方向に曲がり、畑賀（はたが）川等の支川を合流した後、瀬戸内海へ注ぎます。かつて瀬野川は九十九（つくも）川ともよばれていましたが、99 回曲がりくねって流れてくるからなのか、支流が多いからなのか明らかではないようです。昭和 25 年に海田町の二級河川瀬野川に架けられた一般県道府中海田線の橋梁が「九十九橋」と名付けられました。この頃までは「つくも」という名前が知られていたということでしょう。

橋長 75.0m、幅員 4.7m の九十九橋は、４径間単純鋼下路式ワーレントラス形式で、トラスの部材ひとつひとつが、さらに細かいトラスで組み立てられているのが特徴です。これは、架設当時貴重であった鋼材を少しでも節約しようとした当時の技術者の工夫がうかがえる点でもあります。

この橋に使用された鋼材は、終戦直前に空襲を受けた旧光海軍工廠（山口県光市）の廃材でした。当時、橋の工事を担当した広島県職員の証言によると、調達した廃材には、海軍工廠で用いられていた際のリベット孔や空襲の際に空いた弾痕が残されていたため、必要に応じて塞ぎ、また、曲がったものはハンマーで叩いて直し使用したとのことでした。構造上問題のない箇所については補修せずに利用されたため、現在でも、弾痕や橋の構造上不要なリベット孔を見ることができます。

令和３年度に「兵器を製造していた工廠の廃材が戦後復興を支える橋に生まれ変わり、今もなお人々の生活を支えていることが歴史的に価値がある」との理由から、広島市の本川橋とともに選奨土木遺産（土木学会）に認定されました。なお、本川橋も同じ廃材が利用されたことで、九十九橋とは兄弟橋といえますが、もう一つ猫屋町と海田町には不思議な縁があります。本川橋の前身「猫屋橋」を架けた猫屋は、後に海田市へ移って庄屋となり、地域の発展や熊野神社の造営（承応３年・1654）に尽力したとのことです。旧光海軍工廠の鉄材とともに、二つの町をつなぐ縁がここにもありました。

九十九橋
橋長 75.0 m、幅員 4.7 m　４径間単純鋼下路式ワーレントラス橋

■位置図

爆撃を受けた旧光海軍工廠の鋼材
【光市文化センター蔵】

銃弾の跡や利用されていないボルト穴が見える部材

九十九橋